

---

# なんか神様が俺をチートにしてくれるらしい

風車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なんか神様が俺をチートにしてくれるらしい

### 【Nコード】

N7072X

### 【作者名】

風車

### 【あらすじ】

俺は神様に殺されたらしい。でもミスで起こったことらしいから、俺を『ネギま』の世界に転生させてくれるという…。

出来るだけ原作従順で行きたいと思えます

原作通りには行かなさそうです

## プロローグ（前書き）

初投稿です

## プロローグ

「……何処だここ？」

目が覚めたら何もかもが白いどこかにいた  
そして

「すみませんでしたー！ー！」

俺の目の前で土下座をしているこの女の人は誰だろう？

（状況説明中）

「……ということは、あなた達は人の生き死にを管理するのが担当の神様で

俺はあなた達の手違いというかミスで死んでしまったと」

「はい」

どうやら俺は死んだらしい

「それで俺をどこか違う世界に好きな能力を持たせて転生させてくれる、

ということですか？」

「はい」

なんというか神様でもそんなミスあるんだな…なんかイメージが崩れる…

ほら、神って言われるとさあ全知全能みたいなイメージがあるじゃない？

「ところで、ミスってどんなの？」

敬語はやめた。一応、気になるし聞いておこう

「その…あなたの運命を決めた書類をシュレッターにかけてしまった者が

います」

前言撤回、神様は相当アホなようだ

「ふーん、能力ってなんでもいいの？」

「私に出来る範囲であれば、なんでもいいですよ」

なるほど…用はチートにしてくれるってことが…  
どうしたものか…ん？ちょっと待てよ？

「俺って何処の世界に転生されるの？」

「その質問が一番最初に来ない人は、」  
「なんか言った？」  
「な、なんでもありませんっ！」

「何処でもいいんですけど…そうですね『ネギま』の世界ですかねえ」

「え？マジで？」

あいつに借りて読んだだけだからなあ

まあ、面白かったから意外と覚えてるけど…

「なんで『ネギま』なの？」

「あなたが死ぬ前に直前まで『ネギま』のことを考えていたので」

「そんな理由?!」

死ぬ前のことはかすかにしか覚えてないなあ

「魔力と気を多くして、魔法の詠唱速度を長門なみにして」

「はいはい」

「球磨川の『大嘘憑き』オールフィクションを魔力で使うようにして

完璧に使いこなせるようにして。後、体術の心得も」

「わかりました」

「それでは、転生する時代の要望はありますか？」

そんなことまで決めさせてくれるんだ…なんかずいぶんと優遇されてるような

気がする…。まあ俺が死んだのも向こうの手違いだし別にいいか

「じゃあ、場所は魔法世界、20年前の大戦期にとばして」

やっぱ『紅き翼』には関わっておきたいよね

「わかりました。それでは、早速」



## 第一話 「能力確認」

ああああああああああああああああ

下からすつげえ風吹いてきて寒いぐらいだわ

…え？何で下から風がってか？

何を隠そう俺は今、絶賛落下中だからだよ…。

さっきのなんとなく言った「あああああ」も響いて上から聞こえてくるもん

くっそ…神様め…あいつの事殴った後いきなりハイテンションになったかと思えば

下に穴開けてくんだもん（泣） え？手加減？しないしない（笑）  
おもつくそ殴ったよ

その前にもいろいろしたけどさあ…いきなりはなくなる？  
いきなりあんなことしてくるし、いきなり落とされるし…。

「……………痛っ…くないわ」

また、いきなりだよ（泣）ホントに涙出てきた…。

『あ、あの〜聞こえてますか？』

そんなに泣かないでくださいよ…。』

「うおっ?!…またいきなりだね

しかも、勝手に人の心の中読まないでください!」

『あつすみません…』

一応、能力とオマケについて説明しにきました』



「それは、普通にありがたいです  
今はいつの何処ですか？」

にしても、オマケ…何のことだ？

『えっとですね、今は大戦が始まる1年ぐらい前のある森の中で  
すね。』

後、オマケはこちらのサービスです。あつて困ることはないと思  
います。』

まず1つ魔力と気の運用を完璧にしました。  
たぶん、もう両方感じ取れると思いますよ』

ああ、この変な感覚は魔力だったのか…ということは…お、引ッ込  
んだ。

おお、意外と自由自在だな。こっちは気が。

『2つ目は魔法の心得です。適正とかはあんまりあなたには関係な  
いので』

ほとんどの魔法は余裕で使えます。

3つ目はあなたの身体能力を格段にアップさせました。』

さっきの着地の時に衝撃がほとんどなかったのはそのおかげか…。

『最後にアーティファクトです』

それは「真実のモノクル」というもので、そのモノクルを通して  
見た「もの」の

本質を見抜く能力があります。他にも相手までの距離、後は千里  
眼的な能力ですね。』

そつだよこれもいきなりされたうちの1つだよ  
名前呼ばれたから振り向いたら…ね？

『このアーティファクトを出している間は私の魔力…そうですね「  
神の魔力」

とでも言っておきましょうか、それが流れ続けます。若干違いま  
すが

普通の魔力と同じだと思ってもらってかまいません。』

ふーん

『詠唱速度と「大？憑き」はイメージするだけで使えます。』

それは便利だな。

「ありがとうございます」

『いえいえ、それではそちらの世界を満喫してください

それでは、また会いましょう。「球磨川リンネくまがわりんね」さん。』

能力のことは大体わかったな。よし、いろいろ試してみつか  
せっかく身体能力も上がってるし、やってみたいこともあるから

第一話 「能力確認」 (後書き)

「真実のモノクル」はぶっちゃけると、「D・スペードの魔レンズ」  
です

次話「紅き翼」登場!...の予定。

## 第二話 「初実戦と出会い」

「フッフッフ…ハーハッハッハッハッハッハ…」

やっちまったぜ…一人で何を笑っているかって？

怪しいやつに見えるってか…だがそれを気にしたりはしない

俺は今最っつ高に気分がいい。これを笑わずにはいられるかって！

リンネは飛天御剣流、牙突、時雨蒼燕流を会得した！

テテテレテーテツテレー（ff風に）

いや…ね？ほとんど1ヶ月ぐらいで能力の確認が終わったから

町でなぜか売ってた日本刀で遊んでたらできるようになっちゃった

自分でも思うけどかなりカオスだ…。1年かかっちゃったしね

ズドオオオオオオオオオオオオオ

なんだ？いきなりのことには神様のおかげ（せい）で慣れたから  
そんな驚くこともないけど…かなりでかかったぞ？

そこに『魔法の射手』が飛んできた。思わず『なかつたこと』に。

なんかめっちゃ戦ってるけど、とうとう大戦が始まっちゃったか

「来れ」

あーやっぱりそうか…こっちが帝国で、こっちが連合か…

『紅き翼』つてどつちの軍だっけ？

いいや、うるさいし両方叩き潰すか。記念すべき(?)初実戦だな。

「ボソツ…千の雷×3」

ズカアアアアアン

え？無詠唱？いやいや、ちゃんと呪文詠唱してるよ？  
早すぎて聞き取れないだけだよ？

俺の攻撃で混乱している軍の連中の中心へ瞬動で移動して  
螺子で地面に縫い付けていく…ある程度完了したら宙に浮いて

「ボソツ…冥府の石柱×20本」

正直に言おう。キモイ。敵が潰れて血だらけになっていく。  
あとは剣で行くか…(必死で)(これだけのために)練習した暗器  
で刀を出して

「時雨蒼燕流 特式十の型 燕特攻」

(忠実に水を魔法で出して)攻撃、軍を切り刻んでいく  
これだけで壊滅か…なかなか手応えがないな  
返り血浴びまくってるしキモイ…返り血だけを浴びて『なかったこ  
と』にしておこ

「千の雷！」

うおっ！？思わずこっちに向かってくる雷を『なかったこと』にする

「『『『なっ!?!』』』」

うん。いつの間にか反射で『なかつたこと』にできるようになってる  
なんだ? 異様に驚かれてるな…つか誰だあれ?  
もしかして『紅き翼』か? いや絶対そうだな…だって

「お前は誰だっ!?!」

って、見覚えのある。赤毛のガキがいるっー 絶対ナギだよな。

「これをやったのはお前か?」

「『いや、違うね。俺はいきなりこの戦いに巻き込まれただけだし  
こいつらの攻撃で危なく死ぬところだったんだぜ? 俺は被害

者だ』」

## 第二話 「初実戦と出会い」(後書き)

戦闘の描写がムズイ。ムズすぎるぞおおお！

### 第三話 「仲間入り」

side ナギ

「『俺は被害者だ』」

戦場に駆けつけたら、戦いは終わっていて、帝国、連合両方の軍が壊滅していた。

一人を残して、だ。でもそいつは軍の人間ではない。これが問題だ  
どういふことが聞いてみたんだが、そいつは自分のことを被害者だ  
とか言いやがった

意味がわからん…けど俺の『千の雷』を平然と止めやがったし、一  
人で軍を壊滅させた…

これだけは確かだ　こいつは相当強い。

魔力は俺と同じぐらい、気も今までで一番多い。よくわからん能力  
(?)も持つてる。  
じゃあ、やることはひとつ。

「おまえ、俺らと一緒に行かないか？で、戦争を止めるのに協力し  
てくれないか？」

side リンネ

やったぜ！！『紅き翼』に誘われたぜ！

「戦争を止める…か。いいぜ、俺はあんたたちと共に行く」



ちよつとかつこつつけちゃったぜ！！やっベーテンション上がりまく  
りだっ！！

side ????

「<sup>ターゲット</sup>対象は四人の男　そしてこの少年だ」

「フン…なんだ　ガキじゃねえか」

side　リンネ

ナギたちと行動するようになって数日たった。  
今俺たちはとても重要な任務に取り掛かっている…

なんと詠春が鍋を振舞ってくれるらしい！（ドンドンパーファー）

というわけで俺たちは今鍋を囲んでいるんだが…

「じゃ　早速肉を」

「ナギ　おまつ…何　肉を先に入れてるんだよ！」

「トカゲ肉でも旨いかのう？」

2人のおかげでかなりカオスな鍋になりそう

「フフ…詠春知っていますよ日本では貴方のような者を  
『鍋將軍』と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーグン！？」

「っ…強そうじゃな」

鍋奉行じゃないの？って誰も聞いてねーし

……………うん？うおっ！？

ドツ…ガツシャー…

うん…俺は泣いてない、泣いてない目から汗が出てるけど泣いてない。

何かが来た気配がしたと思ったら、上から剣が降ってきたよ  
髪の毛、ちよっと切れた…（ショック！）

それより、詠春が鍋を頭からかぶってる。何あの状況おいしすぎる  
んですけど

お？詠春プルプル振るえてんぞ 正直おっかない

「あ、あのー詠春さん？」

なぜか敬語に…だめだなもう、殺気もれちゃってるもん

「食べ物を粗末にする者は

」

あ、いなくなつた

「斬る」

「お？詠春の攻撃しのいでるぜ」

「あの大男やりますよ」

俺たちは鍋を食べ続けながら（重要）観戦していた

あ、やられた。ダメじゃん　　と思ったらナギが突撃していった

「『おいおい、食事ぐらい静かにしようぜ』」

「リンネ、括弧がついてますよ」

あんまり意識してないんだが『大嘘憑き』を使う直前と直後は

括弧が勝手についちゃうみたいだ

とりあえず詠春が突撃して『なかつたこと』にして  
気絶していたことも『なかつたこと』にした。

「あれ？つて鍋がないiiiiiiiiiiiiii」

「『ああゴメンゴメン食っちゃった』」

鍋も食って『なかつたこと』にしてやった

そのあとなんだかんだ13時間も戦い続けていた

それから何回か戦っているうちにいつの間にかラカンは仲間になっ  
ていた

第三話 「仲間入り」 (後書き)

リンネとラカンが仲間になった

テテテレレテーテテッテレー (ff風に)

#### 第四話 「俺と二つ名とマクギル議員」

side リンネ

突然だが、二つ名についてなんだが

まあナギなら「千の呪文の男」サウザンドマスター、ラカンなら「千の刃」

詠春も「サムライマスター」なーんて呼ばれてるが、あんなもの実際必要ないと思うし、

普通に名前で呼んでもらえれば十分だ

というわけで、俺は「大オールマイクシヨン？憑き」って呼ばれているらしい。わーい  
あつたら嬉しいもんだね。これ。まんま能力の名前だけど、嬉しい  
もんは嬉しい。

嘘憑きが二つ名なんていないんじゃない？地味にひどいと思う  
まあ、弱いフリして油断したやつらをボコってたから  
しょうがないといえば、しょうがないか

そういえば、ガトウとタカミチが新しく仲間になった。

そんでもって、今日、協力者が来るとか言ってたな、誰だ？連合の  
連中か？それはないな

あのクソジジイどもは命令するだけで自分では動かんからな  
外部からだろうか、まさか帝国なんてことはないだろう…となると  
やはり外部か

まあ大して興味はないけど

おあつとどつちだよとか言っつッコミはやめてほしいぞー！

side ナギ

この間仲間になったガトウが今日、戦争を裏から操ってるらしい。完全なる世界』（だっけ？）に  
対抗するための協力者が来るって言った。  
俺らだけで十分なんだが…アルとガトウがダメだって言ってたから何かあんだろうな…。ん？そろそろ来たか？

「マクギル元老院議員！」

なんだ？協力者ってマクギル議員のことか？

「いや、主賓はあちらのお方だ」

？誰だ……？

side リンネ

どうやら協力者っていうのは

帝国と連合、二つの巨大勢力の間に挟まれて翻弄されつづけてきたウエスペタルティア王国の王女アリカ・アナルキア・エンテオフォシア殿下（名前長っ！）のことらしい。

彼女は戦争を終わらせようと自分が調停役になったらしいが、力及ばず、ってことで俺らに助力を求めてきたらしい

…ナギが見惚れてたらしい（ラカン談）  
まあ、確かにキレイだね。ラカンが話しかけたら

「気安く話しかけるな下郎」

って一刀両断されたらしい(いい気味だ)

↓数日後↓

今、ナギとアリカ姫は町に出ている。仲良くなったもんだな。

俺らは今「完全なる世界」について内定している…後一步なんだが決定的な証拠はまだない。やつらの拠点を潰したりしてもうまい具合に情報を壊されてしまう。なんか…うざってえ一回データを壊されて『なかったこと』にしたんだが、ためだったから  
それ以来やってない。

ナギは朝帰りだった。なにをしてきたのかと思えば、  
どうやら、拠点を潰して確かな証拠を持ってきた、  
がつつり詠春に説教されてた。(ドンマイwww)

んで、連合のナンバー2も「完全なる世界」の手下になっているらしいから

そいつのことをマクギル議員にチクって追い出してもらおう  
ってことでマクギル議員の下に今いるんだが、いつまで待たせるき  
だ？

「……法務官は来られぬことになった。……あれから少し考えたの  
だがね。せつかくの勝ち戦だ

慌てて水を差すのもやはりどうかと思っただね。」

はあ？何言ってるのこいつ？ぶざけたことぬかすと…

殺っちゃうぞ

「…来れ（ボソッ）」

ああ偽者が…なる

「待ちな「まあ待て」ってええ？」

変装を『なかつたこと』にすると

「よくわかつたね千の呪文の男、それと『大？憑き』

…こんなに見破られるとはもう少し研究が必要なようだ」

ああナギよそんなに突っ込むな、やられるぞ？

俺の魔法に巻き込まれて。

「ボソッ…雷の暴風×3」

「通しませんよ」

チツ防がれたか…

「わしだ！マクギル議員だ！『紅き翼』やつらは帝国のスパイだつた！」

「『ゲッ』」

やられた。あれでつきり魔法だと思ってた。ちゃんと見ておけばよ



かった…。

『アル!』

『はい?どうしました?』

『なんでもいい!今すぐそこから逃げる!マクギル議員が『完全なる世界』にやられてた!』

『なんですつて!?!わかりました!』

「おい!俺たちはずらかるぞ!」

「「「お…おっ!」「」」

とっさに海に飛び込んだが、完璧にしてやられたな…。

「昨日までの英雄呼ばわりが、一転 反逆者か  
又ツフフ いいねえ人生は波乱万丈でなくっちゃな」

「タカミチ君たちは脱出できたかな」

「…姫さんがヤベエな」

「アルに連絡入れておいたから大丈夫だと思っが。」

どうやらアリカ姫が『夜の迷宮』に捕らわれたらしい。

第四話 「俺と二つ名とマクギル議員」(後書き)

ナギたちの台詞は大分あやふやです。

間違ってたら教えて下さい

第五話 「火と水と救出」 (前書き)

遅くなりました

テストとかで忙しくて…。

## 第五話 「火と水と救出」

side リンネ

反逆者になって数日がたった。今、俺たちは

(『完全なる世界』を潰しつつ)(連合から逃げつつ)

「夜の迷宮」にアリカ姫を助けに向かっている。

で、今は『完全なる世界』の拠点を潰す任務にきている。

もちろん一人だ。あーイーイーメンド。

別に戦いが好きじゃなわけじゃないけど、手ごたえがなさ過ぎて殺す価値さえないやつらが多すぎる。

「さっさと終わらすか。」

一歩踏み出したとき

ピーーーーーードオーーーーン

「痛って…何だ地雷か？」

怪我を『なかったこと』に

「来れ」

結構埋まつてるな、全部『なかったこと』にして

「じゃあ、行くか」

拠点内部

「き、貴様『紅き翼』の　グハッ」

「貴様あ　止まれこれより先には　グッ」

弱い…やる気でない…螺子だけで死ぬとか  
弱過ぎるだろう

向かってくる雑魚どもに向けて螺子を投げつける

雑魚どもの両腕、両足、あるいは腹に  
的確に螺子を差し込んでいくその程度の障壁じゃあ俺の螺子は防げ  
ないな

ん？…魔力を感じるそれもかなりでかい。いいねえ  
雑魚ばっかで飽き飽きしてたんだよっ

ああ、この間の火と水のやつらか

「くらえ」

火と水両方いつぺんに襲ってくるが、

「関係ねえな」

『なかつたこと』にする。牽制に螺子を投げつけて  
その間に詠唱を完成させる

「雷の暴風×2」

一人一本ずつ打ち込んでやる。

まあ当然防がれるが、煙を目隠しがわりにして  
瞬動で後ろに回りこむ

気で肉体強化して 飛ぶっ！

「飛天御剣流 龍槌閃っ！！」

右肩から思いつきり切り裂く  
流石に頭にいく勇氣はないわ

おろ？思ったよりってか手ごたえがない  
手ごたえなさ過ぎて某剣心さん見たいな口調になっちゃったわ

「来れ」

ああなるほどそういうタイプか…

火の精霊化と水の精霊化か

ラカンなら素手とかでやるんだろうな…

あいにくそんなこと俺にはできんし

まあいくらでもやり方はあるんだけどね

「飛天御剣流 九頭龍閃！」

九頭龍閃があたる瞬間に精霊化を『なかつたこと』にする

「なに！？」

牙突のかまえをとり、同じように

牙突が当たる瞬間に精霊化を『なかつたこと』にする

「解放、こおるせかい」

「『生かशीてやるよ。せいぜい頑張りな』」

その後なんだかんであつて

アリカ姫とテオドラ皇女（なんか捕まつてたらしい）を助け出したで、今は俺たちの隠れ家に帰つて来てる

「何だ　これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！

どんな所かと思えばただの掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ　このジャリはよ」

早速ラカンと言ひ合つてるなギヤイギヤうるせーし  
こつちは結構な名場面なのによ

このシーンを生で見れるとは感動だっ！！

その後、味方を増やしつつ、敵の拠点を潰していった。  
で、やつらの本拠地を突き止めた。

その名も「墓守人の宮殿」ぶつちやけラスダんだ。

世界最古の都・王都オスティアの空中王宮最奥部だつたっけ？  
まあそこが最終決戦みたいだぜ

第五話 「火と水と救出」 (後書き)

バトルはオリジナルです

能力は勘です



第六話 「前夜と最終決戦」(前書き)

あとがきで軽くお知らせ(?)があります。

## 第六話 「前夜と最終決戦」

決戦前夜・隠れ家にて

side リンネ

明日が決戦なんだが、下手すると  
やつらの儀式に間に合わなくなる。そこで俺がある提案をした

今ここには「紅き翼」とアリカ姫がいる

「俺の能力について話そうと思う  
すべてを『なかったこと』にする…それが俺の能力だ」

みんな驚いてるな。

「そこで戦いが終わったら、俺がやつらの儀式を  
『なかったこと』にする。そのための魔力を練るのに  
少し時間がかかる、だから間に合わんかもしれない。」

「一回発動すると、『なかったこと』にしても、発動した分の効果  
は残る。」

儀式に近いオスティアは落ちるかも知れん」

「……………」

「その対処、オスティアの民を大規模転移魔法を俺が作る」

「そ、そんなことが可能なのか!？」

第一：崩落が始まったオスティアでは魔法が使えなくなるんだぞ！  
？」

と、ガトウ。他の連中も驚いてるのが目に見えてわかる。

「その点については問題ない。

俺にはこれがある。俺はちょっとした事情で

通常とは根本的には異なる魔力が使えるようになるんだ」

仮契約カードを見せながら、まあ通常の魔力として普通に使えるんだがな、

と付け足す。

「アリカ姫、その作戦を実行するために一つお願いしたいことがある」

「何じゃ？」

「オスティアの民を一番でかい広場か何かに集めてほしい」

「それだけでいいのか？」

「ああ。後どこに集めたかさえ教えてもらえたらいい」

「わかった」

「とまあ、これが俺の作戦だ。

ここまで言っておいてなんだが…異論はないか？」

『ない！（ありません）』

### 決戦当日・墓守人の宮殿前

「不気味なぐらい静かだな 奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「彼らはもう始めています『世界を無に帰す儀式』を」

「そろそろいくか」

### 墓守人の宮殿内部

戦いはみんなに任せてある。

やつらの『世界を無に帰す儀式』（アル命名）を

『なかつたこと』にするには俺でもキツイくらいの魔力がいるんだから、儀式の元にたどり着くまでは任せることにした。

まあ、その敵はもう目の前にいるんだがな

「やあ『千の呪文の男』また会ったね。これで何度目かな  
僕たちもこの半年で君に随分数を減らされてしまったよ」

「このあたりでケリにしよう」

やはり、一対一の形になるか。

あーこの間のやつもいるな。ラカンはやっぱり素手でやるのね  
軽くシヨック…でもないな。あの筋肉ダルマって

危なあーあいつわざとだろう！こっち見て笑ってるし！

そんな余裕あるならもつとがんばれよ

いや危ないから、絶対あいつらわざとだろっ

あっごめんなさいっ　だから流れ弾わざと飛ばすのやめてっ！

あっ置いてかないでっ！戦いながら移動するのやめてっ！

…なんだかんだやりながら普通に勝っちゃうんだね

「見事…理不尽なまでの強さだ…」

「黄昏の姫御女は…どこだ？消える前に吐け」

「フ…フフフ…まさか君はいまだに僕がすべての黒幕だと思っっているのかい？」

「なん…だと？」

あれー？その件については僕言いましたよね？

あいつ人の話聞かないのもいい加減にしてほしいね

っ魔力？それも…おでましかっ！

ドッ…ガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ

壊れたCDみたいだと思ったそこのあなた！

この音はノンフィクションです

やーみんな瀕死だし…？俺？四行前の時点で逃げたよ？何か？

全員の怪我を『なかつたこと』にして…

「みんなやつのは相手は頼むっ！

おれは儀式のほうに行くっ！」

『オウツ！（わかりました）』

第六話 「前夜と最終決戦」(後書き)

どうやらこのまま行くと自分の中で矛盾が出来てしまいそうです…  
少し(結構?)オリジナルな感じになりそうです

## 第七話 「最終決戦・終結」

side リンネ

ここに来てなんかやる気が…まあやるけど

「来れ」

眩きとともに光、モノクルが出てくる

やはりあそこまで複雑に何百何千もの術式が  
組み合わせあった儀式は雑に『なかつたこと』にすると  
まずいと思う。一つ一つ丁寧になかつたことにしていく

やばい。間に合わんかも知れん。

何につて？

ゼクトだよ…

あいつは俺の記憶が正しければ、『創造主』に  
乗っ取られるはずなんだ

みんなで戦ってるから多少は変わるかも知れないが…

よくもまあこんな複雑な術思いつくよね

一つ一つ丁寧に『なかつたこと』にしてい

やっとなんぶんぐらいか？五分くらいだろうか？

こうしている間にも轟音が響いている

ふざけんなどだけ派手にやりやあ気が済むんだよ



発動までの時間が…ヤバツ少し急ぐか

side ナギ

アイツ、強いな。困った…障壁無駄に厚いし  
どうしろってんだよ。

攻撃は浴びせてんだがダメージが通ってる感じがしない

「オラオラアアアア」

アルが重力を浴びせて、その間にジャック、詠春、俺で  
攻撃をつてあぶねっ

「アアアアアアアアアアアア！」

「創造主」の魔法をよける、…いいのか？あそこなくなったぞ？  
だからって、攻撃の手を休める訳にはいかない。

「まだまだア！！ お師匠！！」

「うむっ！」

「千の雷！！」

どうだ？少しは通っただろう

「ぬううう」

「神鳴流決戦奥義！！ 真・雷光剣！！」

「ラカン・本気で右パンチ！！」

「小さく重く黒い洞」

「ふっはははは！いいぞ！貴様らごときが我を追い詰めるか！だが、我を倒したところで魔法世界の崩壊は止められん！！人々を救うには『リライト』しかないのだ！！！！」

「ふざけんなっ！！」

肉体強化、最後の攻撃を叩き込む

「なぜ世界の崩壊そのものを止めようとしねえ！？たとえ、明日世界が滅ぶと知ろうともあきらめねえのが人間ってモンだろがッ！」

杖+雷の投擲！ 俺オリジナル！！  
こいつで最後だッ！！！！

「人間

なめんじゃねえええええ！！」

「創造主」に槍が刺さって炸裂する  
やっ………た… ヤベエな体の力が一気に抜けた  
魔力使いすぎたな…。

..... な!?

side リンネ

もう.....少しッ

.....全部『なかったこと』にしなくても良かった気がしてきた  
まあいいそれじゃないと「黄昏の姫御子」を助けてやれねえから  
いいて事にしておこうか。

コイツで.....ラストッ!!!!

よしッ終わった!!!

...ん? なんか光ったな、ヤツらも終わったか

急ぐか、気で...瞬動ッ!!!!

くそッやっぱりか、ゼクトが「創造主」に飲まれかかってる  
これで最後の魔力だな

ゼクトが「創造主」に飲まれて『なかったこと』にする

「なっ!?!」

「『悪いが、てめえに俺の仲間はやらん!』」

「飛天御剣流奥義！！ 天翔龍閃！！」

説明しよう！！天翔龍閃とは…やっぱりめんどいからしないわ

「くっくく貴様たちもいずれ私の語る『永遠』こそが  
『全て』の『魂』救い得る唯一の次善解だと知るだろう…」

…行った…か、とにかくこれで一段落だ…な…

俺はそこで意識を失った。

**第七話 「最終決戦・終結」 (後書き)**

この後からオリジナル要素が90%になると思います

ストーリー構成が甘くなると思うので

指摘やアドバイスなどあれば、お願いします！

第八話 「寝覚め最悪…いや朝は強いほうなんだけど」 (前書き)

あまり話は進みません

第八話 「寢覚め最悪…いや朝は強いほうなんだけど」

side リンネ

…ん何処だここ？ ああ「創物主」を倒した後、倒れたのか…  
そして何で俺は

アルに見つめられている？

「ああ、起きましたか」

「すみません、間違えました」

アルと反対のほうを向く

「何も間違えていませんよ、後なんで敬語なんですか」

「あの後どうなった？」

「無視ですか…まあいいでしょう。あの後倒れたあなたとナギを運んでアリカ姫たちの下へ戻りました  
それからは、みんな休んでいたの、特に変わったことはありませんね。ちなみに今はあの戦いから一日後です。」

「？ナギたちは？」

「今、終戦を祝う式典で正式に英雄扱いを受けているでしょう」

「お前は行かなかったのか」

「私は人前に出るのが苦手なもので」

「そうか…ところで何で俺のことまじまじと見てたんだ？」

「それは…」

「それは？」

「あなたが小さかったらどんな　　「あ、大体わかったからいいわ」…：そうですか」

どんな女装が似合うかとかそんなんだろう

「違いますよ。そんなこと考えてません。どんな女装をさせて、どう責めようか考えていたんです」

「（今更だけど）変態だ！変態がいるぞー！！」

「大丈夫ですよ、3割冗談ですから」

「やばいコイツ、半分以上本気だ…。」

すぐに身構える

「そんなに拒絶されると　　ムラムラしますね」

「誰かー！助けてっ！俺汚されちゃう！」



「あつはっはっ大丈夫ですよ。からかってみただけですよ」

「そこまでする!?!」

「ここまでやらないとあなた達は面白くありませんからね」

「イツ絶対いつか殺す。」

「やめてください」

「心を読むな!?!...まあいい俺も動くとするか。」

ウエスペルタティア王国・「墓守人の宮殿」近く

「アリカが言うにはこのへんか？」

むう、思ったより多いしめんどくさくなってきた」

はあ、魔力展開：座標指定：術式冷凍：後は崩落が始まってからでいいかな？

「戻るか...」

ウエスペルタティア王国・王都オスティア・酒場

「よお、やってるなー」

「おお、リンネエ」



第九話 「普段温厚でも起こると怖い人っているよね」(前書き)

遅くなりましたー

テストとか忙しくって

第九話 「普段温厚でも起こると怖い人っているよね」

ウエスペルタティア王国・王都オスティア

side リンネ

フム、…どうやら原作通りに魔力やら気やらが無効化されてるみたいだな。まあ俺には関係ないのだが

「来れ」

フツと「神の魔力」が流れ込んでくる。うーん確かこの辺だったよ  
うな…あーいたいた

アリカの艦隊もいるじゃん。ちょうどいいな

「アリカさんやーい」

「な、なんじゃ！いきなり背後に現れるでない！」

「ゴメンゴメン……国民の集まり具合は？この感じだと少し急がなきゃいけないようだが」

「8割方済んでおる。あと10分もすれば完了するじゃろう」

「そうか」

外に出て待つ。よくよく見れば、ナギたちのボロ船もいるし、国民たちも兵の誘導で確実にポイントに集まってきているな。

『アルー』

『何ですか』

『暇』

『……………』

『暇』

『……………』

やつらは原作ほど焦っていないようだ不安はあるが、事前に知らされてる分余裕もあるんだろう

『無視すんなー！変態！ロリコン！』

『暇だからって私に念話して来ないでください』

カツ……………キユキユキユキユキユ！

あぶねエエエ！…！

『暇なのでしょう？』

『すみませんでした…』

『皆さん、リンネが暇だそうです。暇つぶしに付き合っただけでください』

『ッ?! アル??』

ちよっ?! あ、危ねえ!! あいつら遊びに大魔法使うなよ  
千の雷とかしゃねにならねえし、忒の太刀とかマジでやめて…あっ  
やめてごめんなさい調子に乗りました  
俺が悪かったゴメンゴメン

『ギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブ  
ブギブギブギブギブギブギブギブギブギブ』

『あっはははははは どうしたんですか?』

俺はこの日アルだけは怒らすまいと誓った……………

その後、魔力がなくなったら転移魔法がつかえなくなると言ったら、  
攻撃をやめてくれた

結局、一人も犠牲を出さずにオスティアの崩落は終わった。原作で  
言う3%を救うことに俺は成功したんだ。

ただ一人の女性を除いては、だがな

アリカを救うことは出来なかった… あの老害共に虚偽の罪をかぶせられた。まああの老害共を潰す布石は打ってあるんだけどね。

「というわけで、クソジジイどもを潰して、アリカさんの名誉を回復しようを思いまーす」

「何がというわけなのかまったくわからんのだが」

今は俺が立てたとある作戦の概要を説明してるところだ  
ここには紅き翼、リカード、アリアドネーの総長、テオドラがいる。  
防音結界がはってあるから  
作戦が漏れる心配もない

「やつらの　　はもう抑えてある。

ガトウには　　を調べてほしい。タカミチも協力してやってくれ」

「ちょっと待て…そんなことしてどうするんだ!？」

「俺の能力で　　を　　にする。リカードには　　のリストアップ、信頼できる連中を集めてくれ。」

総長とテオドラにはこれの証人になってもらいたい」

「俺たちにできることは？」

と、ナギ。

「アリカさんの救出を手伝ってくれ、俺が　　するから。ナギは  
谷底でキャッチだな

詠春・アル・ラカン・ガトウ・ゼクトには暴れてもらえれば十分だ。  
ナギ、ついでに告白でも　　グフツ」

いってえ…人がせつかく気を使ってやったのに…  
べ、別に面白そうとか思ったんじゃないんだからね!!

「作戦の決行は2年後だつ!!」



第十話 「 と対立フレグつぶし……………と女王救出」(前書き)

遅くなりましたー

第十話 「と対立フラゲつぶし……………と女王救出」

side アリカ

私が捕まってからどのくらいがたったのじゃろうか……………今が昼なのか夜なのか、それとも朝なのじゃろうか？

……………ナギ……………

元気でやっているじゃろうか……………まあやつらなら殺しても死ななさそうじゃがの……………

またやつらか……………何を言われてもしやべらんというのに

「……………ご機嫌いかかでしょうか……………？」

白々しいのお……………なんじゃろうかこやつらは人をイライラさせる才能でも持っておるのじゃろうか……………？

こんな手も足も満足に動かないように拘束されて機嫌がよくなるとは……………いづことじゃ

こやつら……………いづことじゃ……………しとるのじゃろうか？

「……………どうすれば『黄昏の姫御子』と共に封印された墓守人の宮殿最奥部に至ることが出来るのでしょうか？あなたはその方法を知っているはずだ……………さあ言うのです」

私は何も言わん……………それは確かに知っておる。私がやつに頼んだから  
のう

じゃが私は知っている…こやつらにそれを教えれば、またアスナを  
戦争の道具…兵器として使うことを  
だから私は何も言わない。もとより死ぬ覚悟は出来ておる…ただも  
う一度だけでいい

会いたい…ナギ

s i d e  
リンネ

今は絶賛準備中ですねー。あれこうしてああして意外と大変なんだけ？

リカードやアルアドネー、ヘラスの準備は順調なようでつてもアリアドネーとヘラスの準備はほとんどないのと同じなんだけどねwww

「え？ 僕が…ですか？」

「うん。そう。お前が」

いまは天才君に政治を勉強するように言ってる

「お前が政治を勉強して、リカードと協力して新しいメガロメセンブリア元老院を作れ」

まあ、正直、これだけでそこまでするとは思えないが……俺には秘策がある

「それがアリカが、  
を  
したときの手助けになるだろう。  
どうだ？俺の頼み聞いてくれないか？  
クルト」

「ッ！ わかりました。やります！」

………なんか ゴメン 純粋な恋心を利用したみたいで気分はあんまよくないな

それから、クルトは詠春に神鳴流を習いながら、政治のことも勉強したらしい

すべての準備が滞りなく進んだ……あの日から2年がたった

というわけで、鎧の中からこんにちは！球磨川です

しかし、あのくそジジイ共はほんつとにむかつく……今すぐ殺してやりたいぐらいに

side アリカ

「魔獣うごめくケルベラス渓谷 魔法を一切使えないその谷底は魔法使いにとってまさに

『死の谷』」

「歩けッ！」

「触れるな下郎 言われずとも歩く」

この2年間……ひどく面白くなかった……やはり、ナギ達と過ごした日々が楽しすぎたのじゃ

冷たく薄暗い王宮に生まれ……あとは奪い奪われるだけの日々

そういう意味では牢獄と王宮は似ておったの

私の終着点はここだというのなら……それもいい……この死が人々の安泰にとって意味あることを

せめての慰めとしよう

ただひとつ…心残り…

ナギ

そなたの顔をもう一度だけ…主らと過ごした戦いの日々だけが何故か暖かだった

最期の一步を踏み出すと体が浮遊感に包まれた……………

side リンネ

「よしっ！ こんなもんだろ…ぬんっ！！」

あれちょっと早くない？

「まあ、いいか」

俺もこのむさつくるしい鎧脱ぎたかったし

「ジャツ…ジャック・ラカン?! 球磨川リンネ！」

どーもー紅き翼デース

「撮れたか？ ちゃんと撮れたか？ よおーし御苦労！  
いまからこの処刑なかつたことになるいいな？」

「近衛詠春！ アルビレオ・イマ！ ガ…ガトウ!!！」



「チツよけやがった」

あ、でもメガ口兵はモロに食らってたよ

うん！ 一件落着！





第十一話 「紅き翼の球磨川によるアリカのための弾劾裁判」(前書き)

遅くなりましたー

第十一話 「紅き翼の球磨川によるアリカのための弾劾裁判」

side ナギ

無事にアリカを救出できた。…俺も暴れたかったんだが…そ、その  
…まあ色々あつてみんなのトコに行ったらもう終わつてた…アリカ  
は少し痩せちまつてたが概ね健康(?)だった。

…成長してたのはむん　ゲフンゲフンッ!!そんなことより、  
なんかみんなの様子が気になった

くラカンの場合く

「おう、ナギ! やったなってかお前やるな(ムフー)」

「ああ? 何のことだ?」

…エロ親父モード全開だった。しかもすっげえニヤニヤしてた

「でえ? お前何処までいつて　　グフッ」

とりあえず殴つておいた

くアルの場合く

「おめでとつございます。ナギ…あなた中々やりますね(ニヤニヤ)

「

…?」

～詠春の場合～

「おめでとう。ナギ かつこよかったぞ（ニヤニヤ）」

「…??？」

詠春はなんか知らんが赤くなってたし、ニヤニヤしてた

～ゼクトの場合～

「ナギ、よかったのう。とにかくおめでとうじゃ（ニヤニヤ）」

「…????」

お師匠まで……

～ガトウ&amp;mp・タカミチの場合～

「おめでとう、ナギ（ニヤニヤ）まさか、あそこまで…おっと」

「おめでとうじゃいます！ ナギ（ニッ）」

「…????」

タカミチ…はいつもどおりか

……ガトウがニヤニヤしてんのはじめて見た…

～クルトの場合～

「おめでとつじやいます、ナギ（ブッスウーーーーー）」

「……?????」

クルトが一番わけがわからなかった

「……………」

「なんだナギ。お前が考え事とは珍しいな…天変地異の前触れか？」

「いや、そこまでじゃねえだろ」

……………よし。リンネには聞いてみよう

「お前なんか知ってるか？」

「何がだ」

「みんなが俺に『おめでとう』と言ってくれるんだが」

「？お前とアリカが結婚するからだろ」

「それはわかる。なぜかみんな……………ニヤニヤしてるんだ」

「……………わりい。これがあるからだ。」

そういつて俺の肩に手を伸ばすリンネ。何か針みたいなものを持っていた



助けてくれたのはうれしかった。女王である必要もないと言ってくれた。じゃがこれは私が背負うべき罪じゃ。いや背負って生きなければならぬ。私だけが幸せになるわけには行かない。

私も一つ決断をしなければならぬな…ウエスペルティア王国を、王族を終わらせる決意を…

side リンネ

「さあ、いくか」

「……………」

アリカ救出劇の翌日計画を実行に移した。一言で言えば、『メガロメセンブリア元老院への殴りこみ作戦』である。アリカは何か思いつめた表情をしている。…まあ当然か

「準備はいいな？行くぞ」

「な、なんだ！？貴様ら！？」

ざわざわと騒がしくなる

「どうも紅き翼です 今日はおなたたちを潰しに来ました

まあ、そんな身構えるな。命は奪いやしねえよ…ただお前らは今日で終わりだ…世間的な意味でな」

「こ、こいつらを取り押さえる!!」

「ナギ、ラカン、アル、ゼクト、詠春！」

『動くな!』

「やめておけ、てめえらみてえな数だけの質の悪い兵隊じゃあ俺らは捕まえられない」

ナギ、ラカン、アル、ゼクト、詠春には魔力や気、殺気を放つてもらって兵の動きを止めてもらう役割を任せた。

「そのあなた!おっと、そのお前も、あれ?あなたもですか?

……というかここにいるあなた方の名前がほとんどここにのってるんですが……」

「な、何を言っている……………」

「これは戦争の原因だったとある秘密結社kからの提供だ。

kに協力していた人たちの名前が載っている…因みにこれが「コピー」だ」

コピーを渡すことで書類を相手に見せ、不安を煽るあお

「こ、こんなもの…そうだ貴様の偽造した偽者だ!」

フーフーと息を荒げる議員A



「偽者？笑わせるな…こいつは正真正銘本物だ。俺が直々に取りに行ったからな。」

あの戦いの翌日にな、と付け足す…まあこんなこと言っても

「ふざけるな！ならば貴様を取りに行ったという証拠はあるのかっ！」

「それに関しては問題ない。なあ？」

「ええ。アリアドネー総長の私もそれが本物だと証言させていただけわ」

「ヘラス帝国も同じく」

「こいつらにはついてきてもらったからなあ……………つまりは、だ。」

「お前らが戦争を引き起こし、拡大、引き伸ばしていた組織に加担していたのはもうバレてんだよ  
アリカのことにしたってそうだ『災厄の魔女』？ふざけるのも大概にしろ

アリカの父親の名前もここにあるが、アリカ自身の名前はここにはない。自国を破滅に追い込んだ？

むしろ、救った。それも世界全体をだ。最期まで国が落ちるのを拒

んだしな」

「だが、王国が滅んだことに変わりはない！」

「元老院議員ともあるものがニュースや新聞を見ていないのか？それともなんだアリカに逃げられたからどう始末しようか考えてたとかそんなんか

まあいい、とりあえずニュースでも見てみるや」

『見てください！ここは旧オスティアです！崩落した都市が原因不明の浮上を始めています！』

「な…なんだと」

「まあこれは俺の仕業だ。『反魔力現象』を方法は企業秘密だがなだから、アリカの罪状はゼロだ。むしろ冤罪、お前らの押し付けだ…因みにオスティア難民は全員ガトウやタカミチの協力のおかげで保護済みだ」

すっかり静まった元老院議員たち…まあここまでされたら、反論する気にはならんわな  
いや、俺でも諦めるし

「諦めて貴様ら全員逮捕されるや…リカードッ…！」

「任せろ！やつらを取り押さえる！」

「ほら、お前らも働け、刃を向ける相手が違うだろう。心配すんな

お前らは逮捕されねえよ」

抵抗するまもなくつかまった議員たち。

「『お疲れ様でした！ モブキャラの皆さん！ 情状酌量の余地は皆無です！』」

「新メガロメセンブリア元老院の立ち上げをここに宣言する！」

最後はリカ・ドの言葉で締めくくられた

第十一話 「紅き翼の球磨川によるアリカのための弾劾裁判」(後書き)

ちよつとだけ長めでした(それでも全然短いですが)

前半はちよつとしたおふざけです

後半はシリアスでした…いやー変なトコとかあつたら言つてください

ネクスト球磨川's ヒント!!! ウェスペルタイア王国う

## 第十二話 「魔法世界・大改革」

メガロメセンブリア元老院

解体

このニュースが魔法世界全土に流れた。これはとある新聞の一面である

「大戦終戦の2年後、突如現れた大戦の英雄、紅き翼が元老院に対して弾劾裁判を行った。

特に紅き翼の一員、球磨川リンネの活躍が大きく、弾劾するにあたっての証拠を集め、自らが元老院を指摘、解体に追い込んだ。

旧元老院議員の主な罪状は大戦を引き起こした原因である『完全なる世界』に加担、投資などの形で支援していたことが認められた。議員逮捕後の捜査にて、賄賂や組織への圧力、拳句の果てには殺人などの様々な不正が発覚した。

また、今回の一件でウエスペルタイア王国女王、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの罪がすべて冤罪であったことが証明された

今後、メガロメセンブリア元老院は新メガロメセンブリア元老院と名を変え、

メセンブリーナ連合に加盟している国、それぞれが政府を置き自治を行い、各自治体をまとめるのが、元老院になるそうだ

なお、各政府に所属する議員は各自治体ごとに選挙によって選ばれる。つまり、メセンブリーナ連合は魔法世界史上、初の民主主義国家ということになる

ウエスペルタイア王国・王都オスティア浮上の原因は球磨川氏だ  
そうで、方法については

『企業秘密だ（・・・）』とのこと  
オステイア難民の保護は紅き翼ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ氏、高畑・Ｔ・タカミチ少年により  
保護されており、王国は復興（もつとも、町並みは元通りなのだが）  
に向かうそうだ」

side リンネ

昨日の俺の弾劾裁判は全ての新聞やニュースで一面飾った。まあ、他のいろんなやつらの協力がなかったら、ここまで上手く行かなかつただろうがな……。いや、うまく行き過ぎたか……

さあ今日は王国の復興だ。まあ簡単に言えば、アリカの女王復帰宣言なのだが、TV中継するみたいだな  
まあ一度崩落した空中都市が復活なんてのは中々ありえない……というか俺にしかできないだろう

俺にしか出来ないといえは……不老不死っぽい俺、『大嘘憑き』があるからなのか  
年をとったことと、死んだことは勝手に「なかったこと」になるらしい、永遠なんて悲しいだけのようない気がするがな……まあ、最悪、俺の存在自体を「なかったこと」にしてしまえばいい。奥の手だな、これは

あと『大嘘憑き』が体になじんだのかなんのか知らんが、「なかったこと」にした現実を更に「なかったこと」に出来るようになってた。なんとなく出来ないもんかと思っただけでやったら、出来た。あれ？



「お前ら息びつたりな」

「僕たち愛し合ってるんです」

「……………ハア…。」 クルト

「な、ええええええええええ！？」 タカミチ

「冗談だよ、真に受けるな、タカミチ。後なんだそのため息はクル  
ト」

「フフ…そうですよ、軽いジョークです」

「…お前らは少し静かに出来んのか」

「「「「無理」」」」

ナギとラカンも乗ってきた

「大体、お前らが少しまじめすぎるんだよ」 ラカン

「このラカン程とはいわねえが少し気を抜いてもいいと思っぜ？」  
ナギ

「そうだな。少しはこのナギを見習うといい」 ラカン

「……………ッ！」 ガンのくれあい

「「…はあ」」



頭を抑える詠春とガトウこの二人が一番苦労してると思う……あと、ラカンは適当なだけで、頭が悪いわけではないと思う

「おや。もう始まるみたいですよ」

「ホントだな……ほれこれでも飲んでおけ、お前ら」

あれは頭痛薬だ……胃にやさしいタイプ

『現在、オスティアでアリカ女王の王国の再興宣言が行われています……あ、出てきました  
アリカ女王です！』

「……………」

いつになく、真剣だなナギ

『……まず、私たち王族のせいで戦争に巻き込み、結果として王都を崩落させ、難民としてしまったことを申し訳なく思う。すまなかつた……』

こうして、オスティアを復活させられたのは、私がみんなに助けをもらい、命を救われ、協力してもらったからだ。しかし、ここを一時的に崩落させてしまった。このことに変わりはない。

だから、私には王としてこの国を治める資格もつもりもない私の代で、

王族は終わりにしようと思う

難民になったことで奴隷や迫害、差別、様々な苦難にあわせてしまった。そんな苦難にも負けないでいままで家族や子供、親しい者たちを守りながら、支えながら生きてきたのは、他でもない、あなた達ではないのか。

…だから、この国の進む道はあなた達で決めてほしい。今後、この国は様々な苦難などに立ち向かわなければならなくなる。そのたびに、みんなで話し合っしてほしい。みんなでこの国が進むべき道を考えて決めてもらいたい。

今日をもって、ウエスペルタイア王国を解体、新たにウエスペルタイア民主主義共和国の建国を宣言する！！！！」

「やはり…か」

「やはりかってお前、何でそんなことを」

「なんでって俺がアリカに王国を立てなおすって行ったとき、あい

つは喜ぶでもなく、なぜか、暗い顔をしたんだ」

「それだけでそこまで？」

「いや、そこまで予想したのは、難民は保護済みって言った後もそのままだったことだ

アリカほど自国の民を…それこそ身内のように愛していたやつはいない。それなのに、アリカは暗い顔をした。そこでおかしいと思っただ。そこで考えられるのは、アリカが国民に申し訳ないと思う気持ち…

まあ、みんなが難民になったのは自分せいだとも思ったんだろう。だから、アリカは王をやるつもりはない。俺が考えたのはここまだけれど…まさか王国解体とはな」

その後テレビからは歓声だけが流れ続けた

第十二話 「魔法世界・大改革」(後書き)

いやー…こつこついう文は苦手です。

シリアスは難しいですね。

こつこついう形にしたのは、アリカが女王のままだと、この後の展開が苦しくなるからです

間違っているところ、とか変な部分を見つけたらジャンジャン言うてください

感想お待ちしています

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7072x/>

---

なんか神様が俺をチートにしてくれるらしい

2012年1月9日00時53分発行